



県連情報



第 55 号

2003 年 7 月 7 日
発行：日本ボーイスカウト富山県連盟 組織情報委員会

Lineup

第 4 6 回ボーイスカウト富山県大会の感想

かみいちだい 1 だんビーバースカウト	かとう じゅん
富山第 1 7 団カブスカウト	萩原 大也
富山第 1 7 団カブスカウト	大越 翔
富山第 1 7 団カブスカウト	朝内 悠太
富山第 1 4 団カブスカウト	浜井 瞭
氷見第 2 団ボーイスカウト	高橋 康
井波第 1 団ベンチャースカウト	吉田 卓也
井波第 1 団ベンチャースカウト	山崎 裕治
砺波第 1 団ベンチャースカウト	村上 源樹
行事部長 高岡 2 団副団委員長	能登 和敏

ワークショップ「何のためのスカウティングか、誰のためのスカウティングか」参加者の感想

富山第 1 9 団ビーバースカウト隊長	小塚 脩
大沢野第 1 団ボーイスカウト隊長	木下 聡史
高岡第 2 6 団ボーイスカウト副長	本間 賢司
小矢部第 2 団ベンチャースカウト隊長	織田 眞由美
富山第 6 団カブスカウト隊長	岡本 隆史

コラム INFORMATION

「第 4 6 回ボーイスカウト富山県大会の感想」

【ビーバースカウト】

かみいちだい 1 だんビーバースカウト かとう じゅん

ひ見でボーイスカウトの大会があったよ。じゃんけんでぼくがかって、くみちょうになったよ。さいしょにでっかいだんにのぼるゲームをしたよ。早くのぼれるかなと、きんちょうしたけど、おもったよりかんたんで、五人とも早くのぼれてうれしかったよ。つぎのゲームは水とうやスカーフやふくなどをしばって、文字をさがすゲームをしたよ。みんないいアイデアをだしていたからすごいなおもったよ。ぼくもいっしょに考えて、みんなで手をつないでながくしたら文字が見えてうれしかったよ。ぼくがーばんたのしかったゲームは、ドラえもののルーレットゲームだったよ。ぼくは、ドラえもんをあてたけどジャイアンになってしまったよ。小さいドラやきだったけど、みんなおなががすいていたからすごくおいしかったよ。すごくてのしい一日だったよ。らい年もかならずさんかしたいなおもったよ。

【カブスカウト】

「2つの宝物」 富山第 1 7 団カブスカウト 萩原 大也

氷見の県大会で最後にカイガラザイクのペンダントを作ったこと、もう一つは名前をよばれて会場中央に出るとき、ドキドキしながら出て行って顕彰されたこと。これが県大会での、2つの大切な宝物です。

富山第 1 7 団カブスカウト 大越 翔

氷見での県大会の時、初めて賞をいただいてうれしかった。みんなの前で大きな輪になっているのがちょっとはずかしかったけど、とにかくうれしかった。

富山第 1 7 団カブスカウト 朝内 悠太

リーダーから巻物をもって忍者修行をしようと言われたときはワクワクした。忍者修行のパチンコや、魚釣りがとても楽しかったです。県大会の楽しみは、ちがう団で活動をしている友達に会えることです。声を掛け合ったり、ポイントをどれだけ回れたかを話し合ったりしました。僕は顕彰スカウトで表彰されました。名前を呼ばれた

ときは、すごくどきどきしました。ピーバーの時からスカウト活動をしています、今年の県大会は心の中に大きく残ると思います。

富山第14団カブスカウト 浜井 瞭

僕は、県大会で忍者のことを学びました。ムカデきょうそうとかくものすくぐりやしゅりけんやパチンコとかいろいろなしゅぎょうがありました。ぜんぶたのしかったです。

【ボーイスカウト】

氷見第2団ボーイスカウト 高橋 康

今回の県大会は、隊の地元である氷見での開催だったため、見慣れた町を歩く活動、見慣れた建物の中で行うセレモニーとなった。

午前の活動は数箇所の活動チェックポイントを回る形式で、本来は地図を見ながらのレクリエーション。ところが地元ということで、当然ながら迷うこともなく、他の地域に住む人には珍しいであろう町並みを楽しめることも無く、スムーズに回りきってしまった。活動というよりは、ほとんど散歩の感覚だ。地元での開催は、嬉しい反面こういう落とし穴もある。そのため、簡易測量など現地に行えるポイントでの印象は強い。

自分の10メートルの歩幅は何歩か。

正確な測量には、何をどうすることが必要か。

ボーイスカウトの「学習」とは卓上での勉強というものではなく、実際に外に出て、身体を動かすことによって知識と技術を得ることのできる「学習」なのである。それを実感できたのが、今回の収穫と言える。

【ベンチャースカウト】

井波第1団ベンチャースカウト 吉田 卓也

今回の唐島キャンプ(無人島での)は全く初めての経験だったし自分は、あまり話し合いに行くことができなかった状態で参加したので最初はどうかと思いました。唐島は本当に何も無いところでしたが(トイレもありません)他のベンチャーと協力して一泊することができました。それに、他の隊のベンチャーと仲良くなることができとても良い経験をできたと思います。あえて唐島で一番の失敗だと思うのは料理(キムチ鍋)だと思います。鍋と言っていましたが大エリア?リゾット?雑炊?みたいなものになってしまい^^;笑・・・。味がとても薄かったのが辛かったです。根本的に作り方が違っていましたし米が3キロだったのが失敗でした。その後にはコーヒーも自分たちで作りましたが、これも「ヘーこれがコーヒーか」みたいな味でインスタントなれした僕たちには、とても不思議な味でした(;_;)。夜はみなさんと自己紹介もまじえながら話しをして交流を深めることができました。あと夜は思った以上に寒くてあったかい風呂入りたかったです。みなさんと楽しみながら無人島でのキャンプが出来たので寒さも吹っ飛びそうでした。(・・・嘘です。寒さはどうにもなりません。)しかし、もう同じメンバーでこんな経験ができないと思います。今回このような良い経験を支えてくださった(^.^)リーダー、協力してくださった周りの人そして唐島や海にとっても感謝したいと思います。おまけ!唐島でのタイムスケジュールはバッチリでした。

井波第1団ベンチャースカウト 山崎 裕治

県大会に参加して初めは簡単だと思っていたけど、いざ入ってみるとすごい水が冷たかったし、入ってすぐ一人脱落してしまって、そのときまだ水に慣れて無くてうまく泳げなくて、次は自分が脱落してしまうのではないかと考えて心配でした。途中からは水に慣れてきたせいか腕は動かしにくかったけど、くるしくなく進めました途中海水を飲んだりしてつらかったです。からしまに着いて島に足を踏み入れたら足がふらふらで思うように動かせませんでした。上がってからはブルブル震えて回りから着信ありとからかわれました。このプロジェクトに参加して普通ではできないことを体験できてよかったです。

砺波第1団ベンチャースカウト 村上 源樹

県大会では、筏のプロジェクトに参加した。僕は、準備には他の用事が重なって参加できず、当日のみの参加となったので、どんな筏をつくるか知らなかったの、当日にペットボトルをつなげたものをみたとき、本当に四人分の体重を支えることが出来るものなのが不安だった。ペットボトル一個あたり2kgの浮力を得られると聞いてもまだ信じられなかった。しかし、それらが組み立てられて筏の形になると、なぜか気分がのってきて海に出られるような気がしてきた。

午後になってから唐島に向かって出発した。スタート直後に骨組みの竹のくぎが抜けたり、チリトリで作ったオールが壊れて四人で漕いでいたのを三人で漕いだり、流れのぶつかっている所に入ってほとんど筏が動かなくなったりしたが、1時間以上かけて何とか唐島にたどり着くことができた。

大変だったしすごく疲れたが、とても言い経験が出来たと思う。これから報告書を作らなければならないが、今回やったことが無駄にならないようにきちんとまとめたいと思う。

第46回県大会行事部長 能登 和敏（高岡第2団副団委員長・県連盟プロジェクト委員長）

富山県大会見直しとしての大会の3回目である。昨年の反省を受けてそれぞれの部門が「各地区」単位としたことは、準備・機動性・完成度の面で大きなプラス要因となったと思われる。熱く燃え、大きなうねりとなって大会を盛り上げてくれた。地区に分かれた事による弊害を心配していたが、当日の完成度を見ると杞憂であったことがわかった。

これまで開催されていなかった地域、これから伸びて欲しい地域として、今回は氷見を選定したが、多くの地元のみなさまの協力を得る事ができた。学校、公民館、後援などの公的施設の利用、設備・備品の貸出はもちろんのこと、地元の漁協や社寺仏閣などに関しても快く利用させていただいたことを深く感謝する。更に海上保安庁、消防、警察、医療関係者の協力により大きな事故無く開催できたことはこの上ない喜びである。

県大会をスカウトの為に大会にするという大きな目的を達成するため、最低でも大会実施二ヶ月前に参加隊長に実施要項を渡す事を目標に掲げて、スケジュールに織り込んだが、事前会議、事前準備をみなさんの協力をもって実施できたため、予定通り配付することができた。

海岸や街中をチェックのために何度も歩いたが、多くの市民の方から暖かい声援をいただいた。大会に参加しているスカウトにとって地元のみなさんの理解と声援があることは、大きな励みになったに違いない。

ワークショップ「何のためのスカウティングか、誰のためのスカウティングか」参加者の感想

大沢野第1団 ボーイスカウト隊長 木下 聡史

このワークショップに参加したことは、スカウティングとは何かを考えてみる良いきっかけとなりました。「何のため？誰のため？」に対するたくさんの方々いろいろな意見を知ることができ、また、それに対して考えることができる絶好の機会でした。その中でも「大人のためのスカウティングになっていないか？」この言葉が心に深く突き刺さりました。今までに何度かは目にしたことはありましたが、自分には関係の無い話として流していました。しかし、直接この言葉を投げ掛けられ、胸に手を当ててみると思いあたる節がいくつも挙がります。実際のところ、プログラムを立てるのは指導者、スカウト達は与えられたプログラムをこなすだけになっています。指導者は楽しく活動を行っていますが、彼らは楽しいと感じていないでしょう。大人が「スカウトのために」と考えているつもりでも、それが押し付けになっていないでしょうか。子供の頃、ボーイスカウトの活動で経験したことは今の生活の中で役に立っていると感じます。しかし、それを感じられるようになったのは指導者の立場になってからのことです。

各部門で大人の役割は異なると思いますが、ボーイ部門において大人は「指導者」ではなく、「補助者・理解者」ではないでしょうか。スカウト達に活動を押し付けるのではなく、自主的に活動が行えるように、活動が円滑に行えるようにサポートを行うことが大人の役割だと考えます。

スカウト運動の目的はいつも通りの活動を繰り返している、つい忘れてしまいますが、今回のような改めて考える時間を今後も取っていきたいと思いました。

富山第19団 ビーバースカウト隊長 小塚 脩

最近、スカウト活動に対する熱意が下がってきて、こんな自分が指導者をやっているのか？とっておりました。指導者をいつまでやるのか？等と考えることもありました。

しかし、今回の研修で、皆さん同じように感じ、悩みながら頑張っておられる事を実感出来ました。又、スカウティングの基本を再認識する事が出来て、再び活動への熱意も出てきました。この場をお借りして、講師の方をはじめお世話頂いたスタッフの方々に、お礼申し上げます。

さて研修の内容ですが、ワークショップの形式に戸惑いながらも、グループ討議では次第に活発に討議される様になり、最後はチャート紙にまとめる時間が足りなくなる程でした。

スカウト活動の目的について、「人づくり」「自分で考える力を養う」ものである等の意見が出されました。ある方は「人生の羅針盤」といわれた方もいました。

「何のための」と聞かれれば、「よき市民、社会人を育てるため」とスカウティングに携わる方なら答えるだろうと思います。ただ、日々の活動で本当にそうになっているのか？そう思いながら活動しておられる方がどのくらいおられるのか？現状はキャンプ等のイベントを行うことのみで満足していないか？日々の多忙に追われ、ついついプログラムを消化する事のみ終わっていることが多い等、皆さん同じようなジレンマを抱えておられるのだと、感じました。

また、私もそうですが、自分の子どもをスカウトに入隊させたことが縁で、指導者になった方が多く、指導者になったことで「子供たちから逆に教えられる、パワーを貰っている。」「スカウトだけでなく、指導者自身の成長や自己啓発になっている。」「PDCAのプロセスを会得することが出来た。」等、共感を得る意見も多々ありました。

次のテーマ「誰のための」では、青少年のための、「一人一人のスカウト、少年のため」と理解していましたが、中途入隊や、女の子の受け入れ、あるいは障害のある子供などに対して、「現実には100%全ての青少年に門が開かれているわけではない」という問題を認識させられました。また各年代に応じた、子供たちが参加できるプログラムを、指導者が展開させなくてはならないと重要性を改めて感じました。

何故スカウト登録者が減少しているのか、どうすれば歯止めがかかるのか？といった問題には、各地域でのPRを最盛んに行うといった正攻法な意見の他、スカウト活動はビーバー・カブ・ボーイ・ベンチャーという一環教育が特徴ではある。反面、このような長いスパンでないと効果が解らない、また成果が各自の個別評価のため、数値化しにくい、このため野球やサッカーといったスポーツ団体等の方に保護者が魅力を感じてしまうのではないかと少年たちに直接訴える意味で、野球のイチロー、松井やサッカーの中田中村のようなヒーローをスカウトで創れないか？といった意見や、スカウトが主人公の漫画やアニメを連載させたらどうか？スカウトの本を一般の書店で販売すれば、もっと底辺からPRできるのでは？等奇抜な案も出て楽しかったです。

結論として、自分は指導者としてももっともっと、技能と精神を高めなければならないと強く感じました。また、この研修は何十年も係わってこられて、章とかを受章される方にも必ず受けて頂きたい研修であるとも感じました。

高岡第26団 ボーイスカウト副長 本間 賢司

普段自隊の活動に忙殺されるあまり、いつの間にかスカウト運動の目的と原理、方法を振り返る機会がなかったように思われます。

今回のワークショップに参加して活動に生かすために再考できるきっかけとなりました。自分は現役スカウトの時、指導らしい指導を受けた経験がなく、教えてくれるのはもっぱら先輩スカウトでした。また自分も積極的に意見を言っていた記憶があります。

確かに偏った活動ではありましたが、自分たちで考え自分たちで実施した活動は何事にも変えがたい喜びであり、非常に充実した時間を過ごしました。

今の自分の人間形成における骨格はこの時期にできたのではないかと思います。今指導者の道を選んだきっかけも、この経験を少しでも多くの子供たちに伝えられたらという思いからでした。

もう一度原点に帰り、「何のため、誰のためのスカウティグか？」を忘れることなく活動に励んで生きたいと思えます。今回は本当にありがとうございました。

小矢部第2団 ベンチャースカウト隊長 織田 真由美

初めてこの言葉を聞いたとき、「何のため、誰のためか」は言わずと知れたこと、と思った。しかし、あえて口に出して言おうとした時、自分の思いを表すに足りる十分な言葉（他の人を納得させまでの）が見つからなかった。漠然としか理解していない自分に気づいた。それこそ、なぜ私は指導者として、今ここにいるのだろうか、何のためにこの運動に関わっているのだろうか、このままでいいのだろうか・・・という不安が、考えれば考えるほど次々と襲いかかってきた。私は、ストレス満載状態でWSに参加したのだった。

WSでは、世界機構規約 スカウト運動の定義および目的・原理・方法の再確認から始めた。次に、何のためのスカウティングか、誰のためのスカウティングかをそれぞれにおいて異なる3つの側面から討議しあった。視点をはっきりさせ、討議を繰り返すことで現実を自分に引きつけて考えることができた。また、話し合うことで自分自身の持つ課題・問題点をより明確化することができたり、自分の思い（先に感じていたストレス）が納得の行く形で、整理されて行った。

このWSに参加することで、それぞれが内面から気づかされていく「思考のプロセス」が、とても意義深いものと感じた。自分自身が考え、振り返り、原点に戻って（迷った時は何度でも戻って）見つめ直すことの大切さを改めて実感した。そうすることで、今まで見逃していたものや、変えなくてはならないものが見えてくるような気がした。当然それは、一人一人違っていいし、要は自らが自分自身を振り返ることが大切なのだと思う。そして、変えなくてはならないものが見えた時こそ、変えてはならないもの「B・Pの提唱するスカウティングの本質」における不変性が、より鮮明に見えてくるのではないだろうか。

この運動が、ノンフォーマル教育に位置付けられている、ということからも自分だけの一人よがりではなく、今回のような研修を通して自己研鑽することが、社会にとって有益なことに携わっているという責任を担う上でも必要であると思う。基本理念をしっかりと認識し、何のために・誰のためにこの運動に取り組んでいるのかを振り返った上で、いつか、ちかいとおきてを自分の言葉で自信を持って語れる指導者になりたいと思う。

コラム

富山第6団カブスカウト隊長 岡本 隆史

先月、5月31日、6月1日に大沢野の土というところで隊集会を行いました。リーダー会から、隊集会にいたるまでの話です。

大沢野の土というところに土遊野（橋本さん宅）という店というか看板をあげられているお宅があります。そこでは、鶏1,000羽ほどとヤギを飼っていて、乳絞り体験や鶏が卵を産む瞬間を見ることができます。その鶏を戴くことも可能です。野菜等も自分で作り自給自足の生活をされているお宅です。そこで隊集会を行うことにしました。

<リーダー会>

最初は隊として、自然に親しみ大いに遊ぶことを活動目標として、乳搾りしたヤギの乳でチーズを作り、食べ自然にあるもので、工作物をつくる内容のプログラムを立て、自由時間を多くとりスカウトの自主性に任せて遊ぶ隊集会を考えていました。リーダー会を進めているうちに、その鶏を捕まえて実際に締めて羽をむしり食することができるということで体験してみようという話になりました。が、カブスカウトの年代には目の前で死んでゆく鶏を食べるといった体験には刺激が強すぎるのではないかという意見もでました。それを見てもう鶏が食べられなくなるスカウトも出てくるんじゃないかと……。あるリーダーは私たちが食べている豚肉や牛肉、野菜、魚、すべては最初は生きていたものをスーパーなどでパック詰めされ切り身で売られているけど、そこにいたるまでのことはあまり考えていないんじゃないでしょうか、この機会にはいい体験だと思いますと……。ハンバーガーやフライドチキンも最初はみんな動いて生きていたものなんだと……。いろんな意見がでました。

隊長として、確かにカブ年代には初めて体験することもあり刺激が強すぎるかなと思いましたが、いい意味での刺激になってくれることを考えて、戴くことに決定しました。でも、締めて羽をむしって、内臓をとってまでの行為はリーダーがし、その一連の流れを見たいスカウトは見て、見たくないものは見ないというスカウトの判断に任せてやることになりました。

<リーダー会での話を土遊野の橋本さんに話したら……>

リーダー会での話を橋本さんに話すると、鶏を殺して食べる、それを見る見ないかよりも、もっと家族で自分たちが食べているものの話をしてくださいと言われました。リーダー会では、鶏を絞めて戴くという刺激についてスカウトにとっていいのか、わるいのかばかりの討論でしたが、そこで大事なものを見落としていました。生あるものが生あるものを戴いて生かされているという自然の流れ……。そこにあるものはいったい何かということ……。そこでスカウトには家で食べているものは実際はどんな形をして、どう生きていたのか、そして自分たちはどうなってるのか、家族で話をしてほしいことを告げ隊集会の日を待つことになりました。

<隊集会、夕食までの話>

初日の夕食で鶏を戴くことになっていました。1000羽ほど入る鶏小屋で一羽、これから食べるものを選んでと橋本さんがいわれると、真っ先に小屋に入って鶏を抱えてきたのがウサギスカウトでした。これにはビックリしました。その時点でその鶏を食べることが決定しました。スカウトは暖かく動いて生きている鶏を交互に抱えていました。後いくばくかの命の鶏を抱えて……。鶏を絞める時が来ました。全員で合掌をし、心の中でこれから戴く鶏を弔いました。左手で足を持ち、首を下にして右手で首を持ち強く引っ張るといいそうです。スカウトはどんな判断をするのかと見ていました。全員のスカウトがその鶏を囲み、目をそむけることもなく一部始終をみていました。私は一羽の尊い命をこの両手で締め上げました。羽を大きくバタつかせ、目を白くし、そのうち動かなくなりました……。スカウトはずっと見入っていました。しばらく吊るしたのち首を切り落とし、羽をむしり、内臓を出す行為をスカウトも、リーダーもやりました。

<夕食の時間>

先ほどの鶏は中に香草をつめ、レモンを垂らしながらそのまま丸焼きにしました。全員のスカウトがきれいに鶏を戴きました。残すところがほとんどないくらいにきれいに食べました。最後の残飯を見た時には、スカウト自身何か感じ取ってくれたものと思いました。

<土遊野の橋本さん>

命についての話を、違和感なくスムーズに話していただきスカウトにもわかりやすく説明されました。そのおかげで今回の鶏の件も抵抗なくスムーズに入れたものだと思います。『私たちが食べているものはすべて生きているもの、それを戴いて私たちが生かされているんですよ、さっきまで暖かく動いていた鶏もあなたたちが食して、そしてあなたたちが生きている、生かされているんですよ！』そういう話を、ポイント、ポイントでお話されて、スカウトもリーダーも私自身も真剣に聞き入っていました。鶏小屋でこんなお話をされました。1,000羽近くいる鶏を野生の狐とかが小屋を破って入って100羽ほど殺してそのうち何匹かだけとっていくんですよ。かわいそうと思うけどそれが自然なんですよ。ましてや私たちが後から山に入ってきて我がもの顔に住んでいるけど最初から住んでいるのは山の動物たちだからそういう態度でいたら痛い目にあうんですね。住まわせてもらっている、自然と共存していく気持ちを忘れなければ、ここ5年ほどは狐等に荒らされていないけど。でもその気持ちを忘れる

とまたやられると思うけど。アハハッ！なんてこともちょこっと笑いながら話されていました。でも大変よいお話でした。

人間はおごり高ぶってはいけない。自然の一部、自然と共同体ということをおぼえてはいけないと・・・。

<ある保護者から>

隊集会所も終わり、あるところでスカウトの父兄にばったり会いました。先日の鶏の件はいっぱい子供が家庭で話をするとおぼえていました。隊長が鶏を絞めたこと、羽をバタバタさせて死んでいったこと、白目になって動かなくなったこと、その鶏をきれいに戴いたこと、とても美味しかったこと。それ以外の話もたくさん家でしているけど、鶏の体験がよかったと・・・その話で命についてまた家で話をするきっかけになったこと・・・。

<今回の隊集会所で感じたこと>

鶏の一件を考る上で、私が感じたことですが、カブ年代にあったプログラムとはどういうものなのか、はたして、どうしてもそこまでカブでやらないといけないものなのか、深く考えました。今回は自然に親しみ大いに遊ぶという漠然とした活動目標でありましたが、自然を考えていくうちに自然の尊さとは何か？命の尊さとは何か？を深く考えるようになりました。リーダーが心配するくらい討論したことも、今となつては余計な気苦労でありましたが、意味のある会議になったと思ひます。

スカウトが何を感ずるかということ、そこには体験が必要であり家庭での語り合ひが大事なことなんだと・・・。

リーダー共々、今回は大変よい体験になりました。

長々と書きましたが、皆さんの隊ではカブのプログラムをどのような基準でやる、やらないか判断しますか？

(県連盟CS部門MLより、ご本人に許可を得て掲載しました。)

INFORMATION

ケーブルネット氷見で第46回ボーイスカウト富山県大会の番組が放映され、そのビデオを各地区に1本ずつ配布いたします。約25分の番組で、各部門の様子がとてもうまくまとめてあり、最後のシーンは、ボーイスカウトをPRするのに使えるような素敵な編集になっております。ぜひ、各団・隊でご覧いただきたいと思ひます。県連盟にもありますので、レンタルいたします。日連のスカウティング誌7月号では、県大会の記事が2ページにわたって掲載されています。

8月の「ベンチャー有峰キャンプ2003(VAC03)」は、県内の9つの隊から19名のスカウトとスタッフ総勢29名で開催されます。3つのプロジェクト(登山・ナイフ作り・木工クラフト)と5つのプログラム(釣り・天体観測・革ベルト作り等)に挑戦し、本物作りを大自然の有峰野営場で体験します。

平成15年度スカウティング研修会は、11月8日(土)～9日(日)に国立立山少年自然の家で開催されます。各隊の指導者、団委員長、団委員の方の参加をお願いします。詳細は、9月中にお知らせします。

県外で活動を行われる隊は、県外旅行申請書の申請をお願いいたします。県連盟事務局に申請書がありますので、ご一報下されば、申請書をお送りいたします。

オーストラリア交換派遣は、現在1名の指導者(立野政幸さん・高岡2SL・国際委員)と3名のスカウトより申込みがあります。第1回事前訓練を8月初旬に行いますので、その準備に間にあう7月末まで申込を受付けますので、ぜひもう一度中学2年生以上のボーイスカウト、ベンチャースカウトへ声をかけてみてください。現地のオーストラリアでは、ホームステイの受入希望が殺到しております。

WB研修所ピーバースカウト・カブスカウト合同課程富山第1期が9月20日(土)～23日(火)に国立立山少年自然の家にて開設されます。団へは開設要項を配布してありますが、県連盟HP上でもダウンロードできます。申込切は8月20日(水)です。参加者説明会を9月10日(水)県教育文化会館にて行います。

団運営研修所富山第6期が11月22日(土)～24日(月)に二上青少年の家にて開設されます。団へは開設要項を配布してありますが、県連盟HP上でもダウンロードできます。申込切は10月24日(金)です。

FMとやまのボーイスカウト紹介番組「こどもと遊びとともだちと」の放送時間は4月より13時45分頃になっております。

【発行元】

日本ボーイスカウト富山県連盟事務局 tel: 076-432-6505 e-mail: bstoyama@p1.coralnet.or.jp

「県連情報」に対するご意見、ご希望、ご感想をお寄せ下さい。